

## 發刊のこゝろば

古の野中の清水ぬるけれど

もとのこゝろをしる人ぞくむ

(古今集卷十七、曉人しらす)

洋々とながれる大河も、もとへくとたづね、その水源をさぐつてみれば、それは多くの山間の溪流から流れてゐる。そうした山間の溪流もさらにそのもとをたづぬれば、それはふつくと山あいの谷間に沸きいづる泉からでてゐる。山あいでもなくともまた野中にも清水がわき出して旅人がこれをみつめてよろこんで走りよりにくんで渴をいやすこともあろう。清く永遠にたゆることなくこんくと湧き出る泉、それはたとひ人に殆んど知られることがなくても、末は洋々と流れる大河となり海にそゞぐ、そのように私達の歴史の學問も人の知る、知らない如何をとわず、あくまでも泉のごとく清く純粹で客觀的でなければならぬ、そうしてそれは泉のごとく、いつまでもたゆることなく、しかも次第に末は大きく、洋々たる大河となり海にそゞぐごとく、將來性に富むものでなければならぬ。そうして泉のごとく、多難な人生の行路の旅人の渴をいやし、さらにまた山間の溪流から洋々たる大河となつても、また海にそゞいで、いろくな効用をもつて人にいろくと益するものでありたい、われこの雑誌が「史泉」となづけられたことも、このような意味を擔つてゐるといふばかりでなく、さらにそれをいつまでも實現してゆかねばならないのである。